

本文（沙石集）

（小学館『新編日本古典文学全集』による）

尾州の神目寺（じもくじ）の辺（ほとり）に、十二、三ばかりなる女の童、菜摘みけるが、平み、伏しけるを、田かへす者見付けて、怪しみて近づき寄りて見れば、四、五尺ばかりなる蛇、そばに寄りて、まとはらんとす。あさましく覚えて、打ち放たんとて、鋏を取りて、殺さんとするほどに、この蛇、女の童の頸（くび）のほどに当たりて、にはかにしじけて、はひ隠れぬ。

この男、立ち返りて、近く寄りて見れば、寝入りたるやうにて、ほけほけと見ゆるを、「いかに、いかに」と問へば、心地少し出できぬ。「何か覚えつる」と問へば、「ここに、美しげなる若き殿の上臈（じやうらふ）げなるが、『そこに伏せ、そこに伏せ』と仰せられつれば、『何とも仰せに随（したが）はん』とて、伏しつるほどに、何事やらむ、にはかに驚きて、恐ろしげなる気色にて、逃げ返り給ひつる」と云ふ時、「守（まぼ）りばしや、持ちたる」と云ふに、「きる事なし」と答ふ。着物の中まで見れども、守りと思しき物なし。あまりに不思議に覚えて見るほどに、尊勝陀羅尼（そんしようだらに）書きたる紙を、引き裂きて、元結（もとゆひ）にしたるを見出だして、この陀羅尼の徳とぞ知りけり。

守りは人の持つべき物なり。自ら知らざる、なほ益あり。崇（あが）めて持たむ徳、疑ふべからず。

この事、文永年中のころなりけり。（巻九）